柔軟な死の受容
——ブッシュマンにおける死生観の変化を事例に

杉山 由里子

一　はじめに

本稿は、ボツワナ共和国で長年狩猟採集を営んできたブッシュマン（Bushman）と呼ばれる人々[1]が、社会変容の中でどのように死を受容してきたのかを分析する。またその柔軟性に注目し、現代における死の議論の視野を広げたい。

フランスの歴史学者フィリップ・アリエスは（Aries 1977 = 1990）、中世から現代までのヨーロッパにおける死に関する考え方の変遷を分析した。中世では墓地や最後の審判など死にまつわるセレモニーを教会が統括していた。しかし、宗教改革や国民国家の形成を経て死は教会から分離され、現代においては病院に死が委ねられるようになった。こうした死との向き合い方の変遷に関する議論において、現代では、死を前にした人間の孤独化が深まっていることを指摘した。また、人々が死を恐れるが故に、死が隔離の対象となり日常生活か

ら隠蔽される「死のタブー化」の過程を説明した。

死を隠蔽かつタブー視し一種の〝敵〟として扱ってきた反省として、欧米では一九六〇~七〇年代にかけて「死の認知運動」や「死の準備教育」が起こった。この運動や実践は、死に対し前向きに対処し、最終的には死を乗り越えることを目的としたものであった。一般にもよく知られているエリザベス・キューブラー゠ロス(1969)の「死の受容」という言葉は、当初は、死にゆく過程の最終段階として感情が喪失し衰弱した状態として表現されていた。しかし、死の認知運動をきっかけに、死を乗り越えられることができる力強く肯定的な意味として理解されるようになった。多くの人がこの解釈に共感し、それとともに「死の受容」という言葉が広まっていったのである。

死とどう向き合うかという議論は、患者だけでなく家族や身近な者の死を経験した人々にとっても重要である。本論文では、社会が死をどのように説明し意味づけているか、という意味で「死の受容」を用いる。つまり「死」という瞬間的な出来事だけでなく、その前後にある一定の時間的な継続の中にある人々の態度を指す。また本論文では、死に対する人々の態度として、①死者の存在、②死の恐怖や不安、③埋葬様式をとりあげる。

まず「死者の存在」とは、死体をどのように捉えるかという「認識」の問題である。社会によって、死者は先祖やホトケなど敬われることもあれば、死霊や穢れなど災いの原因であり恐るべき対象と認識されることもある。例えばアダムス(1977)は、ボルネオで見られる二次埋葬を例に挙げ、死体が物理的な処理を経て遺骨になることで、精霊という慈悲深い恵みを授ける存在に変化すると分析した。このように死体は物理的にも文化的にも変換され、新しい存在となって社会に統合されていく。

次に「死の恐怖や不安」とは、死にともなう「感情」の問題である。死にともなう恐怖や不安、悲哀という

強い否定的感情はごく自然なものである。また、それらの感情は、自発的なものであり、時に慣習によって達成すべき理想的な感情が準備される場合もある。例えばラドクリフ=ブラウン（1964）は、アンダマン島における人々の悲しみの表現に注目し、葬儀では七通りの異なった泣き方とタイミングが用意されていることを見出した。人々が死と向き合う過程で、達成すべき感情表現が方向づけられていることはアンダマン島に限らず多くの社会で見られる。日本でも葬儀の後には食を囲む時間が設けられ、そこでは親族間の談笑が見られる。ブラウンは、このような方向づけされた感情表現は、個人を統御し社会の連帯を再肯定するためと分析した。

最後に、埋葬様式は埋葬や葬儀などの「様式」である。「埋葬様式」と「死者の存在」、「死の恐怖や不安」はそれぞれが関わり合っている。「埋葬様式」と「死者の存在」の間には、様式の中で死体が死者と認識されていくように、死者と生者の関係性が映し出される。また「埋葬様式」と「死の恐怖や不安」の間には、死にともなう感情の管理が社会の連帯を生むように、社会の秩序が映し出される。また「死者の存在」と「死の恐怖や不安」によって、死の価値観が浮かび上がる。こうした死生観の三側面の頂点、埋葬様式／死者の存在／死の恐怖や不安は、様式／認識／感情とも言い換えることができる。また死生観の三側面は、社会のあり方とも深く関わっていると考えられる（図1）。

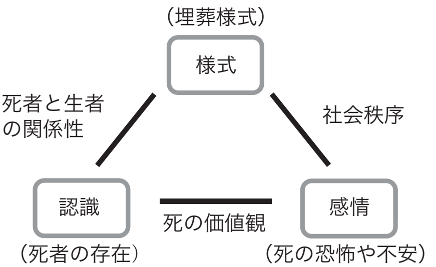

図1　死生観の三側面

ロベール・エルツ（Robert Hertz, 1907 = 1960）やファン・ヘネップ（Van Gennep, 1909 = 1960）は、葬儀を死の儀礼とし、コミュニティのアイデンティティを維持し強化するものとして解釈した。また、社会変容に関する研究は、葬儀や死生観が社会生活の他の側面とどのように関わって

いるかについての再考を促してきた。本稿で対象とするブッシュマンの儀礼体系は未発達であり、初潮儀礼と結婚式をのぞいて儀礼らしいものはないと報告されてきた（Silberbauer, 1963; 田中, 1971）。ブッシュマンの葬儀や埋葬様式は、社会がそのあり方を模索している途中にある。本稿では、ブッシュマンにおける死と向き合う環境が変化していく中で、彼ら自身が死生観を変化させてきた過程を分析する。これによって、生者の生活や価値観の変化によって柔軟に形を変えていくものとして死生観を捉え直したい。

二　調査地域の概要

ブッシュマン（Bushman）とは、コイサン諸語を話し南部アフリカで狩猟採集を営んできた数十のグループをまとめた総称である。調査を行ったN村にはグイ（G/wi）・ガナ（G//ana）と呼ばれるブッシュマンが、またG村にはブガクウェ（Bugakwe）と呼ばれるブッシュマンが暮らしている。これらのグループはいずれも、ブッシュマンの中でもKhoe-Kwadiという言語グループに分類される（Guldemann, 2014）。また、葬儀に関しても三つのグループには多くの共通点が見られる。そこで本稿では、三つのグループをまとめてブッシュマンと表現する。三つのグループに異なる事象が見られる際はそのことを明記した。

N村に居住するブッシュマンの多数はボツワナの中央部に広がるカラハリ半砂漠に位置するセントラル・カラハリ動物保護区（Central Kalahari Game Reserve: 以下CKGR）を主な生活域としていた。またG村に居住するブッシュマンの多数は、ボツワナ北西部に広がるオカバンゴデルタ周辺のンガミランド地域を主な生活域としていた（図２）。彼らは食用植物や水を求め、一年で約一一回、一回あたり二〇～三〇キロ移動して生活していた。狩猟や採集で得た食料は居住を共にしていたメンバーで平等に分け合い、持つものと持たざる者の差

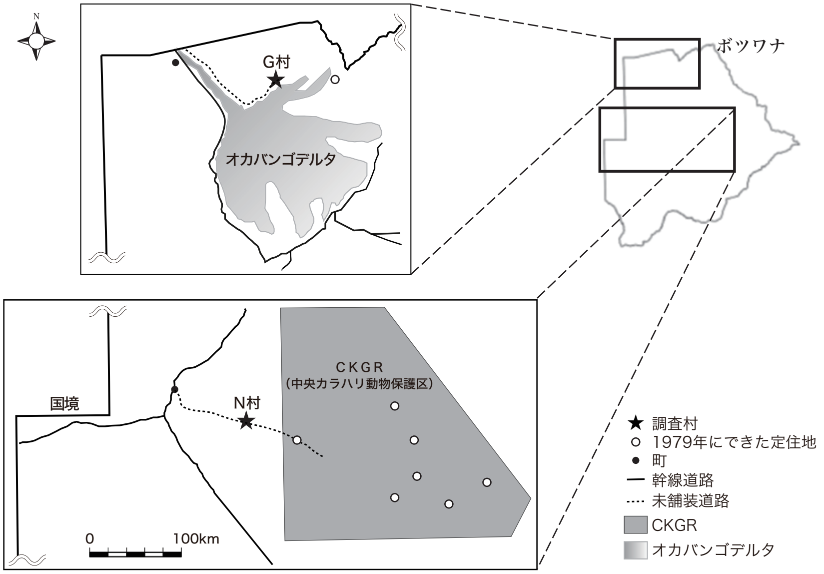

図2　調査地N村とG村

を最小限に抑制していた（田中, 1971）。

このようなブッシュマンの生活は、政府による政策の影響を受け、伝統的な遊動・狩猟採集生活から、定住・集住生活へと大きく変化している。ボツワナのマジョリティであるツワナによってボツワナが独立した一九六六年以降、ブッシュマン開発計画が議論され、一九七四年に遠隔地開発計画（Remote Area Development Program）として具体化した。この政策によってブッシュマンに対する定住化を含む変革が始まる。本稿ではこれ以前を「遊動時代」と呼ぶことにする。一九七九年には定住化政策が施行され、CKGR内またンガミランド地域に定住地が設けられブッシュマンが定住地に移住し定住することが推奨された（図2）。また政府は一九八八年にG村を、そして一九九七年にはN村をつくり井戸や学校、病院を設け、村への定住を促した。移住に反対していた人々も多額の補償金などにつられ、なし崩し的に移住し（田中, 2001）、現在N村には約一三〇〇

人（Suzman, 2001）、G村には約八〇〇人が暮らしている。

N村／G村のそれぞれの大半はブッシュマンが占めるが、その他にもカラハリ（Kgalagadi）が居住している。カラハリはブッシュマンが関係を築いてきた農牧民である。彼らはボツワナの南部からCKGR、ンガミランド地域と居住域を拡大し、一八二〇～一九四〇年ごろにはブッシュマンを動員して狩猟産品を集め、王国に納める役割を担っていた（峯, 2005）。しかし貢物制度の終了や、通婚が繰り返されたことで混血が進んでおり、現在ではブッシュマンとカラハリは民族集団の境界がつねに動いている連続体として捉えられている（丸山, 2010: 52）。

三　埋葬様式の変化

一　遊動時代の埋葬様式

この節ではまず、遊動時代の三人の死の場面を順に記述していくことで、遊動時代における埋葬様式の再構築を行う。G村に住む古老の語りが、聞き取りの中で一番古い埋葬と予想された。以下は一九四〇年ごろに男性が亡くなった際の様子である。亡くなった男性はまだ若く一五歳くらいで、死因は毒蛇に噛まれたことであった。男性の両親と姉妹二人の計五人の一家族のみがその地に住んでいた。夕方亡くなった男性を翌日の明け方埋葬することになり、男性の体勢を両脚の膝を立てて踵を揃え、両腕は両膝を抱え込むようにした。その体勢にしたまま、頭からつま先まで縄でぐるぐる巻きにした。当時はグイと呼ばれる草を石でこすって繊維をとり、さらに繊維をより合わせて縄を作り狩猟の道具に使用していた。埋葬の際に遺体に触れてはならず、体全体を巻くのに加え、墓穴まで遺体を引きずることができるように、長く丈夫な縄を準備しなければならな

かった。遺体には服や靴を着せなかった。亡くなった男性の両親が縄を引っ張って遺体を墓穴まで持っていき、頭を下にして埋葬した。埋葬後、残された家族は十数キロ離れた新しい土地に移動した。

次に一八年後の一九五八年ごろに亡くなったK氏（男性・没年約六〇歳）の埋葬の様子を記述する。K氏とキャンプを共にしていた者たちで、K氏が使用していたゲムズボックの皮でできた毛布に遺体を包み、彼が普段眠っていた態勢（屈葬）で小屋の隣にあるヤギ囲いの中に埋葬した。埋葬後、K氏が使っていた皿を底が上になるようにして置いた。K氏を埋葬してから、三人息子の一人はスティンボックやゲムズボックの毛皮を背負い、片道三日かけて毛皮を売りに行った。そうして得た資金で訪れてくれた人々に振る舞うための砂糖・紅茶・たばこ・ヤギを買った。K氏の息子他二人も、それぞれ別の方向に数日かけて歩き、K氏が亡くなったことを伝え歩いた。息子たちの知らせによってK氏が亡くなったことを知った牧師が訪ねてき、ツワナ語で説教を述べた。埋葬してから約一五日後に、残された家族は数キロ離れた別の土地に移動した。K氏を埋葬した場所は覚えているが、埋葬後にその地を訪れたことはないとN村の息子夫婦は言う。

最後の事例は、現在N村に住む古老から聞き取ったC氏（男性・没年約五〇歳）の埋葬の場面を見ていく。C氏は一九五八〜一九六一年の間に亡くなったと推定した。C氏は夜中に死亡し、翌日の朝に埋葬された。C氏とキャンプを共にしていた者たちで、C氏が使用していたゲムズボックの皮でできたブランケットに遺体を包み、屈葬で小屋の近くに埋葬した。埋葬した後、C氏が使用していた皿と採集で用いる掘棒を目印として置いた。C氏はヤギを所有していたが、当時飲料水がなく調理することができなかったので、特別なものは食べなかった。埋葬して約五日後、C氏と共に生活していた約一〇人は、水を求めて数キロ離れた別のキャンプに移動した。

以上の聞き取りから、遊動時代の埋葬は、裸あるいは死者の使用していたブランケットに遺体を包み、埋葬

後死者の使用していた皿や掘棒を置くことから、費用がかからず簡単な埋葬方法であったこと、また墓地はなくヤギ囲いの中や小屋の外などに、亡くなった当日か翌日には遺体は埋葬されたことがわかる。そして埋葬後、亡くなった者が所有していた家畜を食べたが、水や家畜を所有しない場合は、特別なものは食べなくてよかったこと、さらに埋葬後数日で残された者たちは別のキャンプ地に移動したことがまとめられる。

　実際の調査では上記三人の事例をはじめとして、遊動時代の様々な埋葬様式を聞き取った。これらの聞き取りに加え先行研究により得られた情報から、遊動時代の埋葬から移動までの流れは次のように整理することができる。第一に、埋葬場所については、小屋から少し離れたブッシュの中に老若男女同じ方法で埋葬された。小屋を持たず、あるいは小屋があっても飲料水不足などで墓穴を掘ることができない場合は、ツチブタなど大型動物の巣穴まで遺体を運び埋葬した。小屋がありかつヤギ囲いもある場合は、女・子供であれば小屋の中に埋葬し、男であればヤギ囲いの中に埋葬した。第二に埋葬後地表面に置くものについては、死者の使用していた皿や掘棒を置くか、木の枝を置いた（写真２）。

写真 1　遊動時代の居住地のようす (田中, 1978: 98)

写真 2　遊動時代の埋葬後の様子 (田中, 1978: 185)
掘棒と食器が載せられ、申し訳程度に枯枝で覆われた墓は、かえりみられることもない。

第三に埋葬後の移動については、小屋の中か外のどちらに埋葬しても、数日（一～一五日）後には別のキャンプ地に移動し、埋葬場所を再び訪れることはしなかった。

菅原（1991）によれば、現在ブッシュマンが用いている儀礼や呪薬のかなりの部分はブッシュマン独自のものではなく、カラハリとの長い接触の過程で取り入れたものである可能性が高い。葬儀や埋葬様式においても、カラハリの影響を受けていると言える。上記の「女性と子供は小屋の中に埋め、男性はヤギ囲いの中に埋めた」という部分は、ブッシュマンの遊動時代において定住生活を送っていたカラハリの埋葬（Amanze, 2002: 204）と同じである。地域によって異なるであろうが、ヤギ囲いの中に埋葬したK氏の事例から、一九五〇年代には既にカラハリの埋葬方法がブッシュマンにも浸透しつつあったことがわかる。

上記のように遊動時代の埋葬は簡素であり、先行研究においても死んだ人のことは早く忘れ去ることが重要で死者の墓を特別なものとして作ることはない（田中, 1978: 185）と言われている。

二　現在のN村／G村における葬儀

現在村で人々が死と対面した時、遊動時代とは大きく異なる行動がとられる。N村／G村で人が亡くなった場合、埋葬にいたるまでのプロセスは次の通りである。

自宅または病院で死亡を親族が確認後、親族が村の事務所に報告をする。親族が死亡を事務所に伝えると、事務所の車で百数キロ離れた町にある遺体安置所に遺体は運ばれる。遺体安置所で約一週間（親族の希望日数分）保管される。遺体保管期間の三日間は無料であるが、四日目以降は一日あたり一五〇プラ（約一四〇〇円）[2]の費用がかかる。二つの村の墓地で遺体保存を確認できたうち初めのものは二〇〇三年の四日間であった。二〇〇三年から二〇一六年まで遺体保管期間を確認することのできた二四三の墓では、平均八・一日間保存さ

れていた。葬儀前日に親族が遺体を引き取り、彼らがボクシ（box-si）と呼ぶ棺に入れる。その際、遺体は死亡時のまま保存されているため、有料で遺体を綺麗にするオプションが設けられている。もっとも、これまでの調査では、そのオプションを選択した遺族は見られなかった。棺は政府が無料で提供する棺もあれば、四〇〇〇円～八万円ほどする高価なものまである。棺について実際に葬儀で観察あるいは聞き取りを行ったのは三二件である。このうち四人は政府が無料で提供する棺でなく、親族で費用を出し合って装飾の施された棺を購入していた。棺は葬儀の前日である金曜日の夕方頃に葬儀をする親族の土地まで運ばれる。その際、装飾のついた霊柩車を出すことも有料で行われる。聞き取りではN村で村長をしていた男性一人のみが有料の霊柩車で運ばれた。それ以外は無料の霊柩車であった。町から村までの百数キロの道のりは未舗装の道路で、棺が何度も大きく揺れその度に霊柩車に同乗している親族が棺を確認しなければならない。村に到着後、棺は葬儀を行う親族の小屋に運ばれ、翌日の葬儀まで親族と夜を共にする。翌朝、死者の顔が見えるように棺が開けられ、訪問者全員が死者の顔を見ることで葬儀が始まる。牧師の説教や親族による話が終わった後、棺は再び霊柩車に乗せられ、墓地まで運ばれ埋葬される。

N村／G村の墓地はそれぞれ、村の端に位置する。死者の墓を特

遊動時代の埋葬と同じ、
故人の皿を置いた墓

左奥：陰をつくる墓　　右手前：周りを石で囲んだ墓

写真 3　墓地（N 村）のようす（2015 年　筆者撮影）

別なものとして作ることはなかった遊動時代とは対照的に、棺同様、墓（埋葬後地表面に置くもの）も様々な種類がある（写真3）。一番多く見られるのは、費用のかからない埋葬後墓の周りを石で囲むものであった。二五〇基中、八七基がこのタイプだった。次に多く見られたのは、墓に影ができるように墓の上にトタンの屋根を付けるタイプである。これはツワナで一般的に見られる墓である。陰はツワナで祖先に対する尊厳を示すもの（Werbner, 2007）とされている。このタイプの墓には埋葬者の名前、生年月日、死亡日、埋葬日が記載される。N村の墓地では二〇〇〇年の墓をはじめに見られるようになった。費用が約一万円かかるが、三四基を観察した。一方、遊動時代の埋葬と同様、個人が使用していた皿を置くかレンガや木の枝をさすもので費用がかからない墓は一九ほど観察した。

このように現在の棺や墓は資金をかけるほど、立派なものを手に入れることができる。遊動時代は一様で簡素であった埋葬は、現在では遺体を保管する日数や棺、お墓の種類などを通して、故人とその家族の財力が可視化されるようになり、貧富の格差が目に見えて立ち現れる場所になっていると言える。

四　死の恐怖や不安の変化

一　遊動時代の死の恐怖や不安

続いて、古老へのインタビューに基づいて、死の恐怖や不安について論じる。特に、ブッシュマンの死にまつわる言葉や呪い、死因の変化を見ていくことで、遊動時代は、生活の延長である自然の中に死があり、また自然の中に死の恐怖があったことを明らかにしていきたい。

ブッシュマンの死を表す言葉として、コー／クリの二つが存在するが、それぞれの言葉の背景にあるイメー

ジは少し異なりをみせる。まず、コー（ǁʔóo）には、社会的な応答や反応がないというイメージが背景にある（高田 私信）。例えば、狩猟に出かけ罠にかかった獲物を木の枝で撲殺した際、獲物が動かないことを確認し、「アベ コー 彼／獲物（オス）が死んだ」と狩猟仲間に伝える。聞き取りでは三四人中ほとんどが死亡前に百キロ以上離れた町の病院で治療を受けている一方、病院で死亡した人は一人のみで、ほとんどが自宅で亡くなっている。彼らが人の死を確認する時、呼びかけに対する応答の有無で判断する。彼らは狩猟で捕らえた野生動物に対しても人間に対しても同じ「コー／死」を使ってきた。そこから自然の中で死ぬべきものは平等に死んでいくという、彼らの心構えのようなものが感じられる。

次に、クリ（kʰúrí）の死の背景には、溢れていたものが無くなる、というイメージがある。これは食料、特に水と一緒によく使われる言葉である。五〇歳以上に遊動時代の死についてインタビューをすると、ほとんどの人々が棄老について語る。一人で歩くことができない老人や障害を持った子供を、水のあるキャンプ地が見つかるまで家に残し、水を発見次第、残してきた老人や子を運ぶために家に戻った。しかしほとんどの場合、迎えが来るまでに飲料水の不足や野生動物に食べられ亡くなってしまう。そういった場合、老人や子供を迎えに行った者は居住メンバーに、「チャーサ　クリ（水が終わった）」や「アベ　クリ（彼は死んだ）」と伝える。ここで語られる「水」は飲料水でもあり、人間の身体の「水」すなわち体液とも解釈できるだろう。また、一つ目のコーと合わせて「コー・クリ／死んでしまった（社会的な応答が無くなる）」とも使われる。今でこそ村に井戸があり井戸が故障した際も町からトラックで水が運ばれてくる。しかし、ブッシュマンが生活してきた極度に乾燥した大地では、水の有無がしばしば人々の生死を決定してきた。

自然の中にはほかにも様々な危険がある。次に挙げるような野生動物との接触による死や、野生動物から死がもたらされることは、不吉なものとして扱われていた。一つ目は蛇に噛まれて死亡するケースである。G村

の九〇歳の女性の語りでは、彼女が当時約一〇歳のとき年上の兄が狩猟の途中で蛇に噛まれ亡くなったこと、埋葬後それまでで一番遠くのキャンプへ移動したこと、が話された。当時、狩猟による怪我は英雄のように人々の間で語られたのに対して、この兄の死は一切話題に挙がらなかったそうである。三章一節で挙げた若者の男性の死も毒蛇に噛まれたことによる死であり、当時そのキャンプ地に水があったのにも関わらず埋葬後はとても遠くに移動した、と語られた。これらのことから、自然界の中でも特に毒蛇によって唐突に発生する死は人々から恐れられていた。また埋葬後に居住地を遠くに変更することで、移動という行為実践において人々が予期しなかった若者の死の処理を行っていたことがうかがえる。

また、蛇の毒とは別の形でもたらされる野生動物による死を人々は恐れていた。G村の九一歳女性は、昔は動物から人への呪いによって人が死に、彼女の当時二歳の娘もその呪いにかかったことがあると語る。動物によって呪う民族は異なり、例えばライオンとヒョウはカラハリを呪い、ブッシュマンを殺すことはなかった。しかし病気にさせた事例はあり、ヒョウによって呪われたブッシュマンはヒョウのような模様が皮膚に出たという。ブッシュマンが最も恐れたのはジャッカルやシベットといった小動物で、彼らは主にブッシュマンの赤ちゃんに病気をもたらし殺しさえしたという。この呪いは、ジャッカルなどを料理した時、その肉を食べずとも、調理の時の匂いなどから子供を病気にさせた。呪いにかかった子供は、手に力が入り指が曲がってしまったまま、猫のように喉をゴロゴロ言わせながら呼吸困難で亡くなってしまうと言う。

自然の中で生き抜いてきたブッシュマンにとって、みな同じように訪れる死の前にはちっぽけな存在であり、人は必ずいつか死ぬというあらがえない運命を身をもって理解していた（田中，2017）。自然の猛威に対して恨みを抱くことは益のないことであり、彼らの取りうる対処の仕方は、つねにあきらめと忘却であった（田中，1978: 183）。このように彼らの死に対する態度は現実主義的であったと言える。しかし、老いて綺麗に死んで

いくということができないこと、野生動物との接触や呪いによって若くして予期せずに死ぬことは不吉であり、恐れられていた。

二　現在の死の恐怖や不安

遊動時代の死の恐怖や不安が、自然との関りの中で生活の延長上に存在していた一方、現在のそれらは大きく異なる。定住が進み、人々が集住して生活するようになったことで、死と対面する機会が増加した。今の葬儀についてどう思うかという質問に対し、ある八九歳の女性は次のように語る。「今日の葬式は昔とは違う。なぜならとてもたくさんの死があるから。昔は人が死んで、ずっと後に誰かの死があった。そのころには前の人の死は忘れていた。今日は子供でさえ死ぬ、親が死ぬずっと前に。もし昔、今のように葬式があったら、家族はみんな死んでブッシュに誰もいなくなるだろうね。」人々がこのように困惑する背景には、現在は死因が大きく変化し、その結果、若者の死が目に見えて増えていることによる。近代化の中で葬儀は、他民族の影響に加え、移動や流通によって改変されることが多い。これらは、ブッシュマンの葬儀においても非常に大きい影響を与えた。交通や流通などの整備は、一九八〇年代にボツワナ政府と連携したダイアモンド会社デ・ビアスによって大量の鉱物を運搬するため、また政府による野生動物の調査や管理のためになされていった。道路整備によって、遺体をスムーズに移動させ保管することが可能になった。こうした新しい埋葬様式を支える道路交通の整備は、同時に、ブッシュマンの交通事故死の増加を招いたとも言える。聞き取り調査では、N村で死亡した三〇人のうち、三人が交通事故死、一人が道路建設労働の過労によるものだった。

交通事故に加えＨＩＶ感染の拡大も多くの若者の死に影響している。クリニックでの調査では、N村で計一三〇人、G村では計八五人もの村人がＨＩＶの治療を受けていた。村人の中にはまだ症状が出ていなかった

り、出ていながらも病院に通っていなかったりする人も多い。そういった人々を加えるとさらに多くの人がＨＩＶに感染しているだろう。さらに、二〇一八〜二〇一九年の一年間で、Ｎ村で三人、Ｇ村で一人が自殺によって亡くなっていた。三人はいずれも二〇〜三〇代の若者であった。ブッシュマンたちは、ＨＩＶのことを〝政府の病気（goromente-sika tsãā-sa）〟と呼ぶ。それは、政府の政策が始まって以降に急激に出てきた病気であることによるが、その背後には、政府のせいで自分たちはこのような運命にあったのだという意味合いも含んでいるように感じられる。ＨＩＶそのものへの恐れというより、かつて彼らが持ち合わせていた美しく生き、また美しく死ぬことが困難になっている現状への憂いが感じられる。

遊動時代、五〇歳を超えての生存は少ない（田中，1990: 155）と言われてきた。これに対して、Ｎ村やＧ村では五〇歳を超えての生存は珍しくはなく、むしろ五五歳で病死した者の葬儀では、彼が若くして死んだことを残念がる発言が葬儀参加者から語られた。現在のブッシュマンの平均寿命は遊動時代と比べ、上がったと予想される一方で、交通事故やＨＩＶの感染、自殺による死は、極端に若い者の死を招いている。恨みにも似たような、尾を引くような感情が付きまとう死が、外界の世界から持ち込まれた。

五　死者の存在の変化

一　遊動時代の死者の存在

第三章一節での遊動時代の埋葬の語りからわかるように、遊動時代は人の死をきっかけに居住地の移動があった。飲料水が豊富にあった土地で人を亡くした場合、埋葬後も居住地を移動させずそのまま住み続けたという事例も聞き取った。ほとんどの場合は数日以内で居住地を移動していた。また第四章一節の若者の毒

蛇による死のように、予期しなかった若者の死の後にはより遠く移動した。このような死を背景にした移動から、遊動時代の死者の存在を見ていきたい。G村のブッシュマンは人を埋葬した場所は「ツォー／tsóò」であるから移動したと説明する。ツォーとは、立ち入るべきでない領域という意味があり、埋葬地以外にも使われる。例えば、ブッシュマンにとって陸ガメはとても貴重なため年寄りが食べるべき動物であり、もし食べようとする若者がいれば、「あなたと私の間にはツォーがある」と言って自分たち（年寄り）が食べるべきであることを示す。一般的なツォーの言葉には、特に悪い意味合いはなく、超越的な何かによって近づくべきでない場所というイメージで使われている。一方で埋葬場所に使われるツォーには、その超越的な何かに不吉さが含まれる。例えば、G村の男性は、埋葬場所の近くに動物がいればハンティングしに行ったが、その場所はとてもツォーだったので、距離をとってハンティングしたが、ある男が埋葬場所の上を歩いたために、その男の足首が逆になり障害を負ったのを見たと語る。N村ではG村のように埋葬地を「ツォー／tsóò」と言うことはないが、儀礼のことを「ツォー／tsōō」と言う。同じ「ツォー」のように見えるが抑揚が異なる。N村のツォーは治療や薬を意味し、超越的な何らかの作用や働きという意味合いを持つことから、G村のツォーと起源を同じくすることが予想される。[3]

ブッシュマンの抱く不吉さは、埋葬場所よりも死人に対してより強くなる。人々は、死人が悪夢を見せたり病気をもたらしたりすると信じている。また、悪夢でなくとも、死んだ人が夢に出てくることも不吉な予兆とされた。死んだ人が夢に現れることは、死人がその人に夢を見せたと解釈され、夢を見せられた者は死が近いことを意味した。例えば、ある老人が「死んだ姉と孫が野イチゴを摘んで食べている夢を見た」と言うと、死人（亡くなった姉）が老人に夢を見せたと解釈される。このことは噂となって居住メンバーに広がり、居住メンバーみんながその老人の死が近いことを日常の語り合いの中で共有した。

また、N村では夫と子供を同じ年に亡くした女性が「色んな嫌なことを捨てて、移住した」（今村, 2010: 117）と言うように、居住を共にするメンバーの死と居住地の移動は関わりがあった。遊動時代は人の死があってすぐに埋葬された。墓穴を埋める際には居住メンバーみんなが一握りの砂を順番に墓穴に投げ入れる。これは、死んだ人は砂にかえっていく（今村, 1998）と信じるブッシュマンが、死人が「cʼûĩ si !ûĩ（綺麗に行く）」こと願ってする行為であった。この行為実践は、死者が砂に綺麗に去っていくことを願うと同時に、死者が自分たちに夢を見せないように死者とさっぱり別れることを願った生者のためでもあった。

二　現在の死者の存在

遊動時代、埋葬場所はツォーだから近寄ってはならない、死人の夢は死を意味すると言われていた一方で、現在はいつでも墓地に行っていいとされている。彼らがこれまでに死者の存在を変化させえたのは、他民族カラハリから学んだ死後の手続き、特に清めの薬の影響が大きい。カラハリは埋葬後、遺族が特定の木の枝を煮詰めた抽出液を飲むことで清めが完了するという手続きをとる。狩猟採集民ブッシュマンにとって農牧民カラハリは、狩猟産品を要求してくる怖い存在でありつつも、「父と兄を亡くし家族を守る男がいなくなった時、カラハリを頼って生活した」というように共同生活をしていた事例も見られる。G村のカラハリの夫を持つ九〇歳の女性は、「カラハリは何でも持っていたし何でも知っていた。ヤギをたくさん持っていて、農耕の仕方も知っていた。そして彼らの薬のおかげで、色んなことが可能になった」と言う。例えばブッシュマンが赤子を亡くした場合、その両親は埋葬後数か月離れて暮らす必要があったが、カラハリから習った薬を埋葬後に飲むことで両親は離れずに生活を続けることが可能になった。また夫を亡くした場合、若い未亡人以外は独身でいなければならなかったが、カラハリから習った薬を埋葬後に飲むことですべての未亡人が再度結婚できる

ようになった。

現在の葬儀は、死から埋葬まで数週間の時間があり、埋葬前にはみんなで故人の顔を見なくてはならない。故人の顔写真入りの葬儀行程表が配られ、葬儀や埋葬の際には頻繁に讃美歌が流され、故人の名前入りの墓が作られる。かつてブッシュマンにとって死んだ人のことは早く忘れ去ることが重要とされていた。しかし、現在の葬儀では故人を穏やかな美しさの中で記憶することが望まれるような演出がされる。このような変化の中で、ブッシュマンにとっての死者の存在と夢の関係性も変化している。遊動時代は、死者が夢を見せることが死を意味した。一方で現在は、死者が夢を見せたにもかかわらず、当人がその夢を忘れてしまうことが死に繋がると解釈されている。つまり、死者が夢を見せることではなく、生者が死者の夢を忘れることこそが死と連結して理解されるようになった。例えば心臓病を患っている一〇歳の少年は次のような経緯で、死人が見せた夢を忘れたつまり死が近いと理解された。少年が町の病院から帰ってきた際、家族は彼をある村人に診せた。様々な薬をカラハリから習ったというその村人は、伝統医のような存在で知られている。この村人が火を焚きその灰をカメの甲羅に入れて煙を少年に吸わし、少年が死者の見せた夢を忘れていないかどうかをチェックした。その結果、四年前に亡くなった少年の父親が彼に夢を見せたにもかかわらず、彼がその夢を覚えていなかったため、彼の死は近いと診断された。

また、現在はお金をかけて立派な葬儀をすれば、死者はいい夢を見せてくれるとも言われている。遊動時代は死者との繋がりを感じてしまうことが不吉であり、死者を思い出す行為は避けられていた。一方現在は、故人を大切にするカラハリの新しい葬儀によって、死者のイメージの変化と同時に死者から生者へ死の原因の書き換えが起こっている。

六　新しい死生観とブッシュマン

かつてブッシュマンは死の原因を日々の会話で議論し、好ましくない行動や禁忌によって解釈した。災いをもたらすものとして「カバー／q^haba」（ツワナ語で dikgaba）という概念がカラハリから伝わり、人々に受け入れられてきた。これは、親族に肉やお金を分けない行為や、誰もが認めない婚外性関係を続けること、あるいは遠方へ出かけたきり消息不明になって家族に心配をかけるなどの正しくない行為によって人々を苦しめた結果、その苦しみが人に入り込んで重病にあわせることである（今村, 1998: 56）。人々は死の説明としてカバーを語り合った。同時にそのような死の「理由づけ」によって誰かの死は他の誰かにとって意味があるものとして意義づけられた。言うなれば、その人は豊かな意味に満たされた脈絡の中で死ぬべくして死んでいった（菅原, 1994: 408）。人の死は、自然を前にした人間の無力さを見せつけた。人の死や自然の猛威に対して、人々は嘆き悲しむよりもあきらめて早く忘れるという態度をとってきた。死の悲しみを早く忘れ、尾を引かないさっぱりとした別れが重要であった彼らにとって、こうした理由づけが必要であった。

一方で現在は、死因の変化や対面する死の数の増加、死の中心的年齢集団の変化などによって、コンテクストが創りづらく、処理しきれない死を淡々と処理していくための〝死のガイドライン（澤井, 2005: 166）〟つまり形式や型としてのカラハリの葬儀手順を人々は必要としたことが示唆される。死者を早く忘れることが重要であり、また平等主義的と言われていた彼らにとって受け入れがたいであろう、死者を記憶する要素が垣間見られ費用のかかる葬儀も、死者の存在を変化させることで、新しい死の受容をつくり上げている。

同時に、こうした新しい葬儀や死生観は、みんなで共有する死を可能にし、さらにそれは集まりと繋がりの力を生んでいる。遊動時代の居住メンバーは一家族から一〇家族くらいで構成され、多い時でも五〇人ほどで

あった。そのため、小さな集団や個人で死と向き合う必要があった。一方で現在は集住しているため、葬儀の際には数百人が一つの場に集まる。数週間かけて人々が集い葬儀の準備をし、葬儀前日は夜通しみんなで歌を歌う。埋葬後には遺族が一人ずつ紹介され、参加者たちは親族関係と同時に支え合うべき仲間を再確認する。今村（1993）は、ブッシュマンの重要な慣習の一つに、人々が共に行動する協同作業を挙げている。他者との関係において起こる一種の感応ないし共振や同調（市川, 1984）が、この協同作業によって共有されているという。例えば、根茎掘りの採集という真面目な作業が、徐々に人々の行動が同調しエスカレートすることで、歌や踊りなどの遊びの要素が加わり、人々はその時間と空間の中で人々と共存していることを体験する。かつて狩猟や採集活動でなされていた協同作業は定住化でその機会が大きく減少した。葬儀の場に代表されるような、新たな共有される行動の場が生まれている。これによって、これまでになかった形での協同作業や同調的行動が可能になっている。

七　柔軟な死の受容

遊動時代および現代におけるブッシュマンの死の受容について、死生観の三側面、すなわち様式／認識／感情という観点からまとめる。遊動時代、ブッシュマンでは死者のことを早く忘れ去ることが重要とされた。それは、死者は不吉で死をもたらす近づくべきでない存在と認識されていたからである。死は彼らの生活の延長である自然の中にあった。生活の行為実践の一つである移動によって、物理的かつ心理的に死者との別れが支えられ、生者が自然の中で生き続けることを可能にしていた。一方で現在は、ＨＩＶや交通事故などこれまでになかった死が外部世界からもたらされ、死と向き合う新しい様式を必要とした。このような死因の変化と同

時に増加した若者の死は人々の不安を膨らませ、死者の存在の書き換えを促した。新しい様式は死者を不吉なイメージから解放し、薬やお金によって交渉可能な存在にした。また新しい様式手順を共同で実践していく中で、協同作業や同調的行動が達成されている（図3）。

ブッシュマンが採用した移動に代わる新しい様式は、カラハリ経由でツワナから伝わったものであった。そこでツワナの死生観の三側面も整理しておく。ツワナにとって重要なことは、集団の相互関係を再確認し、その中で死者を記憶することである。死者の存在は、土地を永久的に定義する重要なものと認識されている。達成すべき正しい情緒の状態が集団によって方向づけられて管理され、死の空間を上手くマネジメントしていくことで、集団のまとまりや一体感が生まれている（Durham and Klaits, 2002）。

ブッシュマンとツワナの死生観の三側面を比較してみると、ブッシュマンがツワナの埋葬様式を取り入れつつも、彼らの死者の存在や死の恐怖や不安についてはツワナのものに塗り替えず、遊動時代からもつ彼らの価値観を上手く変容させていることがわかる。ブッシュマンは定住化の過程で、居住地と社会関係の整理（丸山, 2010）や、シェアリングの継続と社会秩序（池谷, 2007）、儀礼の意味の転換と相互関係の再編（Takada and Sugiyama, preparing）など、したたかな適応の姿が明らかにされてきた。死生観においても、そのしたたかな適応の姿が垣間見える。ブッシュマン

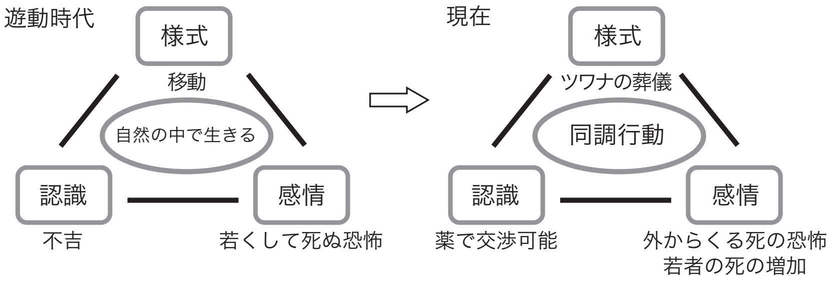

図3　ブッシュマンの死生観の三側面の変容

は他民族の様式を柔軟に取り入れることで、遊動時代からもつ彼らの認識や感情を発展させ、新しい環境下で死の受容を達成している。

死生観の三側面、様式／認識／感情が互いに関係し合うことによって、死者と生者の関係性や社会秩序、死の価値観が再編される。このような死生観の持つ「社会的価値を形作る力（Geertz, 1973: 94-98）」や「社会的な絆の存在を肯定する力（Radcliffe-Brown ,1964: 240）」といった特徴を、ブッシュマンは同調的行動として発展させた。つまり、死生観の三側面には、社会の死の受容とともに、生の価値が立ち現れる。ブッシュマンが死の受容を柔軟に変容させてきた姿は、生者の生の適応の姿とも言える。

これまでブッシュマンにおける死者の存在の変化や新しい葬儀の受け入れを見てきた。最後に、時代とともに変化してきたブッシュマンの死に対する柔軟な態度から、現代における死の受容とその議論を再検討したい。死生観の三側面を用いると、様式は教会から病院へと移り変わり、死はタブーと認識されるようになった。また人々は死と向き合うことを不安視し、死を隔離することが重要とされてきた。アリエスの古典を総括しつつ、Mellor と Shilling（1993）は、近代における死が公的領域から私的領域へと移動したことから、人々は個人で死の不安と向き合わなければならず、それは人々の現実に対する不安や存在論的不安に繋がっていると言う。冒頭で紹介したように、欧米では一九六〇～七〇年代にかけて「死の認知運動」が起こり、ロスの「死の受容」に本来の意味にはない力強く肯定的な感情が付与されて広まった。これらには、それまでの死生観の三側面、特に認識と感情の変化がともなっていた。また人々の変化の欲求の根源は、現代における隔離された死の解放よりもむしろ、集まりと繋がりの社会的な絆の中で死を受容することにあっただろう。

ブッシュマンは死生観の三側面のうち、特に様式には頓着せず、柔軟に新しいものを受け入れた。そしてそれは、決して伝統的な死生観の喪失ではなかった。ブッシュマンはその死生観をたくみに変化させ、安定的に

死の受容を実現してきたのである。その過程は、普遍的な死生観といったものは存在しないことを示している。現代社会が創り出してきた、個々人が死を肯定的に受容することで、みんなが死を乗り越えようとすることもまた一つの変化のあり方であった。これからも私たちは、その時代の死に合わせながら柔軟に死生観を書き換え、集団の中での新たな繋がりの形を模索しながら死を受容していくだろう。とりわけ変化の激しい現代社会においては、今までの様式に固執せず柔軟に新しいものを受け入れ、死生観を変容させることが望まれている。

■註

1　ブッシュマン（Bushman）とはコイサン諸語を話し南部アフリカで狩猟採集を営んできた数十のグループをまとめた総称である。そのうちの約半数が住むボツワナ共和国においては「バサルワ（Basarwa）」という用語が採用され、またナミビアや南アフリカでは「サン（San）」が一般的な呼び方である。これらいずれも「原野に住む野蛮な人々」「家畜を持たない人々」「貧しい人々」といった差別的な意味合いも含まれている。筆者が対象にしてきたN村のグイやG村のブガクウェは、自分たちのことを「ブッシュに生きる人々」と呼んでいる。また、日本でもブッシュマンが馴染まれていることから、本稿では「ブッシュマン」を用いることにした。

2　1 pula＝9.07円（二〇二〇年八月レート）で換算した。

3　N村の「ツォー／tsōō」儀礼と治療については、今村（1998）に詳しく記載されている。G村の「ツォー／tsóò」と起源を同じくするかどうかは、今後言語学的議論が必要である。

■参考文献

澤井敦（2005）『死と死別の社会学――社会理論からの接近』青弓社。

池澤優（2020）「死生学再考——フランクルとベッカーを軸にして」『死生学・応用倫理研究』25: 9-40.

池谷和信（2007）「カラハリ狩猟採集民における生業と分配」『アフリカ研究』70: 91-101.

今村薫（1993）「サンの協同と分配——女性の生業活動の視点から」『アフリカ研究』42: 1-25.

今村薫（1998）「グイ・ブッシュマンにおける儀礼と治療」『名古屋学院大学論集 人文・自然科学篇』34 (2): 43-83.

今村 薫（2010）『砂漠に生きる女たち』世界思想社。

市川浩（1984）『〈身〉の構造——身体論を越えて』青土社。

菅原和孝（1991）「サンの会話構造——長い語りを中心に」、田中二郎・掛谷誠編『ヒトの自然誌』平凡社、107-135.

菅原和孝（1994）「ひとりのグウィの女が死んだ」井上忠司・祖田修・福井勝義編『文化の地平線』世界思想社、393-413.

田中二郎（1971）『ブッシュマン』思索社。

田中二郎（1978）『砂漠の狩人——人類始原の姿を求めて』中央公論社。

田中二郎（1990）『ブッシュマン——生態人類学的研究』思索社。

田中二郎（2001）「ブッシュマンの歴史と現在」田中二郎編『講座・生体人類学1カラハリ狩猟採集民——過去と現在』京都大学学術出版会、15-70.

田中二郎（2017）『アフリカ文化探検　半世紀の歴史から未来へ』京都大学学術出版会。

フィリップ・アリエス（成瀬駒男訳）（1990）『死を前にした人間』みすず書房。

丸山淳子（2010）『変化を生きぬくブッシュマン』世界思想社。

峯陽一（2005）「モレポローレと砂漠のフロンティア——一九二〇年代末の英領ベチュアナランドにおける遊動民の捕捉について」『二〇世紀研究』6, 1-26.

Adams, M. J. 1971. Work Pattern and Symbolic Structures in a Village Culture, East Sumba, Indonesia. *Southeast Asia,* 1(4): 320-334.

Amanze, N. J. 2002. *African Traditional Religions And Culture in Botswana*. Pula Press.

Durham, D. and Klaits, F. 2002. “Funeral and the Public Space of Sentiment in Botswana,” *Southern African Studies*, 28 (4): 777-795.

Kübler-Ross, E. 1969. *On Death and Dying*.（鈴木晶訳, 2001.『死ぬ瞬間——死とその過程について』中公文庫）

Greertz, C. 1973. *The Interpretation of Culture*, Basic Books.

Guldemann, T. 2014. *'Khoisan' linguistic classification today. Beyond 'Khoisan': Historical relations in the Kalahari Basin*. Amsterdam, Netherlands: Benjamins.

Mellor, P. A. and C. Shilling. 1993. "Modernity, Self-Identity and the Sequestration of Death," *Sociology*, 27 (3): 411-431.

Silberbauer, G. B. 1963. Marriage and Girl's Puberty Ceremony. *Africa,* 33 (4), 12-24.

Suzman, J. 2001. *An Introduction to the Regional Assessment of the Status of the San in Southern Africa*.Windhoek: Legal Assistance Centre.

Radcliffe-Brown, A. R. 1964. *The Andaman Islanders*. New York: Free Press.

Takada, A. 2015. *Narratives on San ethnicity : the cultural and ecological foundations of lifeworld among the !xun of north-central Namibia*. Kyoto University Press.

Takada, A. and Sugiyama, Y. Imagination on the past and memory for the future: Re-establishment of the lifeworld through ritualistic activities among the G|ui/G‖ana, *African Futures,* (preparing).

Werbner, Richard. 2007. *Shade Seekers & the Mixer*, Manchester, UK (DVD).

（すぎやま・ゆりこ　京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科　博士課程）

Flexibility in the Acceptance of Death: A Case Study of the Changing View of Life and Death among the Bushmen

Yuriko Sugiyama

After Elisabeth Kübler-Ross published *On Death and Dying* (1969), the words "acceptance of death" rapidly became more common. She explained "acceptance of death" as the fifth and final stage of grief, the other four being denial, anger, bargaining, and depression. She also described "acceptance of death" as a patient's debilitation and the near complete loss of emotions. The debate about how people accept death has become a very important issue not only for patients but also for society and families that have lost some of their members. In the western world, the death awareness movement occurred from 1960 until 1970. In this movement, people tried to overcome death and the concept of acceptance of death had gained a more powerful and positive meaning. The movement happened because people wanted to reflect on their behaviors and attitudes toward death, some of which were related to death as a conflict of life, tabooed death, and sequestrated death. However, it was not clear what people were afraid of. As a result, the discourse of differences of behaviors toward death depending on era and ethnicity has become a very important topic.

This paper describes how the Bushmen in Botswana accepted death during a period when their society was changing drastically. To explore their view of life and death, this study focuses on: (i) the changing of burial style, (ii) the change in the fear of death, and (iii) the change in the image of the dead.

People in Bushmen societies are changing from hunter-gatherers to settlers engaged in collective living because of their sedentarization by the Botswana Government managed by the major ethnic group, Tswana. In Bushmen villages made by the Botswana Government in 1988 and 1997, the funeral practices have been changing for several decades. When they lived as hunter-gatherers, their simple burials aligned with their views regarding death. It was important for them to forget the dead quickly because they believed that the dead would conjure up ominous things and result in the death of others. However, nowadays, they are adopting the Tswana funeral practice; even though it is important for Tswana to remember the dead, they are remembered as ancestors, as opposed to fearful entities. This change has helped the Bushmen overcome the fear of death–relating to both the causes and the number of deaths. Even though they adopted a new funeral style, they modified the image of the dead by themselves without adopting a new one. For example, nowadays, they believe that the dead would not conjure up ominous things by using medicines.

This study reexamines and compares how the attitude toward death among the Western people in the modern era and the flexible response among the Bushmen to accept death changed with time. People coped with death in the church in the Middle Ages. On the other hand, death has been isolated and sequestrated within hospitals in modern times. As a result, death has become a taboo and people have become afraid of facing death. By turning the words of Kübler-Ross's "acceptance of death" into a positive thing, people tried to get over death in modern society. It was a flexible strategy for accepting death. The Bushmen's flexible view of life and death and their process of stably accepting death as a reality, elucidate that there is no universal way of accepting death and that society has to evolve with marked flexibility.